

体育授業における達成目標と援助要請の関係

Achievement Goals and Help-Seeking in Physical Education Setting

藤田 勉*

FUJITA Tsutomu

要約

本研究の目的は、達成動機づけの階層モデル（Elliot & McGregor, 2001）に基づき、体育授業における達成目標と援助要請の関係を明らかにすることであった。研究の方法は、中学1年生から3年生までの1069名（1年生男子221名、1年生女子166名、2年生男子213名、2年生女子161名、3年生男子145名、3年生女子163名）を対象とした質問紙調査であった。質問紙を構成した項目は、成功接近欲求・失敗回避欲求（有能感・失敗恐怖）、2×2達成目標（熟達接近目標、熟達回避目標、成績接近目標、成績回避目標）、援助要請（適応的要請、依存的要請、要請回避）であった。質問紙調査から得られたデータについて探索的因子分析及び検証的因子分析を行った後、内的整合性を算出した。その結果、各尺度の妥当性及び信頼性はいずれも満足する水準であった。これらの尺度を用いて、成功接近欲求・失敗回避欲求が達成目標を媒介して援助要請に影響するという仮説モデルを構築し、構造方程式モデリングを行ったところ、仮説モデルにデータが適合するという結果が得られた。

キーワード：自己調整学習、動機づけ、スポーツ、有能感、運動意欲

* 鹿児島大学教育学部

1. 緒言

学習場面で分からないことに直面したとき、教師に質問できずに分からないままにする生徒がいれば、質問することにより課題を解決しようとする生徒もいる。このような生徒が他者に対して課題解決のための援助を求める行為は学業的援助要請（以降、援助要請とする）と呼ばれている（Karabenick, 1998, 野崎, 2003a）。教育心理学の分野では教室内の学習場面に焦点が当てられているが、体育授業においても、スポーツや運動をする中で、分からないことやできないことについて教師に質問し、運動技能を改善していくあるいは有効な作戦を考えていくための手がかりを得るという行為は援助要請になると考えられる。

野崎（2003a）や瀬尾（2007）は、先行研究（例えば, Butler, 1998; Nadler, 1998; Newman, 1991; Ryan & Pintrich, 1997）による援助要請の質の区別により、適応的要請（自分自身で問題を解決する方法を学ぶための援助要請、自律的援助要請とも呼ばれている）、依存的要請（他者が問題解決してくれることを最終目的とする援助要請）という2つのタイプの援助要請と要請回避（意図的に要請を避ける）を挙げている。援助要請の研究では、援助要請が適応的な学習方略になりうるとしても学習者の多くは積極的に援助要請を行わないことが報告されてきた（Newman, 1990; Newman & Goldin, 1990）という背景から援助要請を規定する要因の検討がなされている（野崎, 2003a）。

野崎（2003a）は、先行研究のレビューから、性差（例えば, Butler, 1998; Newman, 1990; Ryan & Pintrich, 1997）について、男子よりも女子の方が、適応的要請を多く行い、要請回避傾向が低いことを示した報告はあるものの、全ての研究の結果は一致しておらず、性差に関連した他の要因があることが考えられ、一致した見解が得られていないこと、また、発達段階（例えば, Butler & Neuman, 1995; Newman, 1990; Newman & Goldin, 1990）については、学年が上がるほど援助要請をしなくなる傾向があり、意思決定が青年期に近づくにつれ、より複雑化していくこと、また、援助要請の質も発達に伴い変化することを報告している。さらに、野崎（2003a, 2003b）は、有能感が援助要請を規定していることを示した研究（例えば, Butler, 1998; Newman, 1990; Ryan & Pintrich, 1997）にも触れているが、種々の側面を考慮に入れる必要があるとしている。

近年では、達成目標が援助要請に影響する要因として検討されている。達成目標理論（Ames, 1992; Dweck, 1999; Elliot & McGregor, 2001; Nicholls, 1989）では、有能さを獲得することへの目標の捉え方の違いが行動に影響することを説明する。達成目標には、主

に理解や努力を通じて能力を高めようとする熟達目標（学習目標，課題志向性とも呼ばれている）と自他に対して高い能力を示し，低い能力を示すことを避ける成績目標（遂行目標，自我志向性とも呼ばれている）の 2 種類がある（上淵ほか，2004）．達成目標は，有能感のような期待的な側面のみならず，有能さの捉え方という価値的な側面も概念に含まれていることから援助要請との関連について有効な知見が得られるのではないかと考える．

野崎（2003a, 2003b）や上淵ほか（2004）によれば，欧米の教育心理学における先行研究（例えば，Butler & Neuman, 1995; Newman, 1998; Ryan & Pintrich, 1997）では，熟達目標は成績目標よりも適応的要請を促進し，成績目標は依存的要請や要請回避を促進する結果が報告されているという．わが国の教育心理学では，上淵ほか（2004）が，達成目標から，援助要請の利得感を媒介して援助要請行動に影響することを明らかにしたが，援助要請の損失感から援助要請行動の頻度へは有意な影響が示されなかった．このことについて，援助要請行動の頻度というよりも援助要請の質を区別した概念への影響を検討することでより有効な知見が提示されるのではないかと考える．野崎（2003b）は，成績目標から，能力感への脅威，シャイネス，無効感，自律性を媒介して，適応的要請，依存的要請，要請回避へ影響するという仮説モデルにより援助要請を階層的・多面的に捉えることの有効性を検討しているが，熟達目標から適応的要請と要請回避へ，遂行目標から依存的要請へ直接的な影響も示されており，多くの媒介変数を組み入れたメリットが生かされていないため，他の仮説モデルの検討も必要である．そこで達成目標と援助要請に媒介変数を仮定するのではなく，達成動機づけの階層モデル（Elliot & McGregor, 2001）のように，接近と回避の両側面から概念化された達成目標から援助要請への影響が説明できるのではないかと考える．

達成動機づけの階層モデルでは，Atkinson & Feather（1966）の達成動機づけ理論の考え方が応用されており，階層構造の低次に成功接近欲求と失敗回避欲求が位置づけられ，それらの欲求が接近と回避の両側面から概念化された 4 種類の達成目標へ影響し，行動が決定される．これまでの達成目標と異なるところは，熟達目標と成績目標のそれぞれに接近的側面のみならず，回避的側面も概念された点である．熟達目標には，熟達を目指す熟達接近目標と熟達できないことを回避しようとする熟達回避目標の 2 種類があり，成績目標には，他者より優れることを目指す成績接近目標と他者より劣るところを回避しようとする成績回避目標の 2 種類がある．このように，接近と回避の 2 側面，熟達と成績の 2 側面により概念化されたことから，2×2 達成目標とも呼ばれている．

体育・スポーツ心理学における達成目標理論研究では、Nicholls (1989) の考え方に基づき、Duda (1989) や Roberts et al. (1998) により目標志向性尺度が開発され、数多くの研究が展開されてきた。目標志向性尺度では、スポーツをしている時、どんなことで成功を感じるかという質問に対し、努力したときや全力を尽くしたときに成功を感じる課題志向性（熟達目標）と他者より優れたときや相手を負かしたときに成功を感じる自我志向性（成績目標）が測定され、認知・感情・行動との関連が検討されてきた。先行研究からは、課題志向性の方が自我志向性よりも、学習方略の使用などの認知的側面、楽しさやフローなどの感情的側面、運動参加や持続性などの行動的側面において適応的であるとされている (Biddle et al., 2003; Duda & Ntoumanis, 2003; Roberts, 2001)。しかしながら、自我志向性については、楽しさや満足感などと正の関連が示されることもあり (Duda & Hall, 2001)、不適応的であるという結論には至っておらず、諸刃の剣（例えば、Barkoukis et al., 2007; Stoeber et al., 2008）と喩えられることもある。このことについては、わが国の教育心理学においても、結果の非一貫性として指摘されている（例えば、村山, 2003; 上淵, 2003）。そこで、この問題の解決策として考えられているのが、達成動機づけの階層モデルである。

Conroy et al. (2003) によってスポーツ用、Wang et al. (2007) によって体育授業用の 2×2 達成目標尺度が開発され、体育・スポーツにおいても達成動機づけの階層モデルの研究は増えつつある。Nien & Duda (2008) は、スポーツ選手を対象として、成功接近欲求に有能感、失敗回避欲求に失敗恐怖を仮定し、これらが達成目標を媒介して動機づけに影響するモデルを検討した。その結果、有能感からは熟達接近目標と成績接近目標へ正の影響、失敗恐怖からは、熟達回避目標、成績接近目標、成績回避目標へ正の影響が示された。そして、媒介変数である熟達接近目標からは、内発的動機づけへ正の影響、非動機づけへ負の影響、熟達回避目標からは非動機づけへ正の影響、成績接近目標からは外発的動機づけへ正の影響、熟達回避目標からは非動機づけへ負の影響が示された。また、同様のアプローチによって、Chen et al. (2009) は、セルフハンディキャップへの影響を検討し、成績回避目標と熟達回避目標から正の影響があることを報告し、新たな知見を提供している。達成動機づけの階層モデルでは、回避的な達成目標からの影響が検討できるため、従来の達成目標理論を発展させるような知見が提供され则认为られる。しかしながら、研究の数は未だ少なく、達成目標と援助要請の関係は明らかにされていない。

体育授業において、達成目標と援助要請の関係を検討することにより、スポーツや運動

に取り組む中で、課題の解決に困難さを感じている生徒の援助要請の有無や援助要請の質の違いについてのメカニズムが明らかにされる。また、達成動機づけの階層モデルを応用することにより、達成目標と援助要請に媒介変数を組み入れることなく、シンプルなモデルが構築されることになる。そして、4種類の達成目標のそれぞれから援助要請への影響を検討することで、これまでの達成目標理論にはできなかった影響関係の検討が可能になり、接近と回避の両側面から概念化された達成目標の有効性が示されるのではないかと考える。

以上のことから、本研究では、達成動機づけの階層モデルに基づき、体育授業における達成目標と援助要請の関係を検討する。分析の手順としては、本研究の目的を達成するために必要な尺度（有能感尺度、失敗恐怖尺度、2×2 達成目標尺度、援助要請尺度）を作成し、尺度の妥当性及び信頼性を検討した後に、「有能感・失敗恐怖→達成目標→援助要請」というモデルを構築し、構造方程式モデリングを行う。

2. 方法

調査対象と調査方法

N 県及び K 県の中学校 5 校の 1 年生から 3 年生までの 1069 名（1 年生男子 221 名、1 年生女子 166 名、2 年生男子 213 名、2 年生女子 161 名、3 年生男子 145 名、3 年生女子 163 名）を対象とした質問紙調査を行った。調査依頼をした各学校へは、調査の趣旨が記された依頼状と調査票のサンプルを学校長宛に郵送した。その約 1 週間後、電話連絡にて調査協力の可否を尋ね、同意が得られた学校へ調査票を郵送した。郵送された調査票は、各学校の体育担当教員あるいは担任から生徒へ配布され、回答が行われた。回答終了後、調査票は回収され、郵送にて返送された。

質問項目

成功接近欲求・失敗回避欲求を測定する尺度については、McAuley et al. (1989) の有能感尺度（成功接近欲求）、Conroy et al. (2002) の失敗恐怖尺度（失敗回避欲求）を参考に、有能感 3 問、失敗恐怖 3 問の計 6 問を作成した。これら 2 つの尺度は、スポーツ選手を対象として達成動機づけの階層モデルを検討した Nien & Duda (2008) においても使用されている。2×2 達成目標を測定する尺度については、スポーツ用に開発された Conroy et al. (2003) と体育授業用に開発された Wang et al. (2007) の接近と回避の両側面から

概念化された達成目標尺度を参考にして、熟達接近目標 4 問、熟達回避目標 4 問、成績接近目標 4 問、成績回避目標 4 問の計 16 問を作成した。援助要請を測定する尺度については、教育心理学の分野で作成された野崎（2003b）と瀬尾（2007）の援助要請尺度を参考にし、適応的援助要請 4 問、依存的援助要請 4 問、要請回避 4 問の計 12 問を作成した。なお、各尺度を作成するときは体育授業場面に対応するよう各項目の表現を改良した。

統計解析

質問項目の分析として、探索的因子分析と検証的因子分析を行い、各尺度の妥当性を検討した。各尺度の信頼性については内的整合性（ α 係数）により検討した。その後、各要因間の影響関係を仮定したモデルを構築し、構造方程式モデリングを行った。探索的因子分析、 α 係数、基本統計量（平均、標準偏差、歪度、尖度）、相関行列の算出には、SPSS12.0 を使用した。また、検証的因子分析と構造方程式モデリングには、AMOS5.0 を使用した。

3. 結果

因子分析

有能感尺度・失敗恐怖尺度

有能感尺度及び失敗恐怖尺度の項目について、主因子法プロマックス回転による探索的因子分析を行った。因子抽出の条件は初期の固有値 1.0 以上とした。各因子を構成する因子負荷量を 0.4 以上として因子を解釈したところ、各 3 項目で構成される 2 因子が抽出された。各因子を構成する各項目の因子負荷量は、.58～.88 であった（表 1）。

表1. 有能感と失敗恐怖の探索的因子分析

		F1	F2
有能感 ($\alpha = .83$)	自分の運動能力は高い方だと思う。	0.88	0.02
	ほとんどの運動は上手くできると思う。	0.82	-0.01
	自分の運動能力には満足している。	0.66	-0.01
失敗恐怖 ($\alpha = .76$)	失敗したときは、次にどうすれば良いのか戸惑ってしまう。	0.06	0.84
	失敗したときは、他の人が私をどう思うのか気にしてしまう。	0.06	0.74
	失敗したときは、自分には才能がないと思ってしまう。	-0.18	0.58
F1		—	
F2		-0.23	—

次に、これらの因子構造の妥当性を検討するため、検証的因子分析を行ったところ、モデル適合度指標は良好な値（GFI=.979, CFI=.973, RMSEA=.084）であった。各潜在変数から各観測変数への影響指数については、.63～.87 という値が示された。各尺度の信頼性の検討として内的整合性を算出したところ、有能感尺度（ $\alpha = .83$ ）、失敗恐怖尺度（ $\alpha = .76$ ）のいずれも満足する水準であった。

達成目標尺度

達成目標尺度の項目について、主因子法プロマックス回転による探索的因子分析を行った。因子抽出の条件は初期の固有値 1.0 以上とした。各因子を構成する因子負荷量を 0.4 以上として因子を解釈したところ、各 4 項目で構成される 4 因子が抽出された。各因子を構成する各項目の因子負荷量は、.53～.92 であった（表 2）。

表2. 達成目標の探索的因子分析

		F1	F2	F3	F4
成績回避 目標 ($\alpha = .85$)	上手くできないところは、他の人に見せないようにしたい。	0.87	-0.01	-0.02	-0.07
	他の人より上手くできないところはかくしておきたい。	0.84	0.01	-0.02	-0.04
	苦手なことがあるのを他の人に知られないようにしたい。	0.72	0.02	-0.02	0.04
	他の人より劣るところは、見られないようにしたい。	0.60	-0.01	0.14	0.02
熟達回避 目標 ($\alpha = .85$)	教わったことが、全て理解できているか気になる。	-0.06	0.85	0.07	-0.05
	学んだことを全ておぼえているか心配だ。	-0.02	0.82	-0.04	-0.01
	教わったことが、しっかり習得できているか気になる。	0.00	0.79	0.00	0.08
	習ったことを全て上達させることができるか心配だ。	0.20	0.53	-0.05	0.11
成績接近 目標 ($\alpha = .83$)	他の人と比較して、優れていることが重要だ。	-0.04	0.08	0.92	-0.17
	他の人よりも、よくできていることが重要だ。	0.00	0.00	0.83	-0.01
	他の人よりも、上手く見せることが重要だ。	0.06	-0.09	0.62	0.15
	他の人よりも、早く上達することが目標だ。	0.05	-0.03	0.54	0.19
熟達接近 目標 ($\alpha = .78$)	学んでいること全てをできる限り習得したい。	0.03	-0.02	-0.02	0.80
	教わることは、全て上手くできるようになりたい。	0.00	-0.03	0.06	0.71
	できる限り多くのことを学んでみるのが重要だ。	-0.07	0.06	-0.01	0.64
	やってみたいことをしっかりと身に付けることが目標だ。	-0.04	0.07	0.02	0.55
	F1	—			
	F2	0.34	—		
	F3	0.42	0.30	—	
	F4	0.04	0.50	0.39	—

次に、これらの因子構造の妥当性を検討するため、検証的因子分析を行ったところ、モデル適合度指標は良好な値（GFI=.951, CFI=.956, RMSEA=.057）であった。各潜在変数から各観測変数への影響指数については、.61～.84 という値が示された。各尺度の信頼性の検討として内的整合性を算出したところ、熟達接近回避尺度（ $\alpha = .78$ ）、熟達回避目標尺度（ $\alpha = .85$ ）、成績接近目標尺度（ $\alpha = .83$ ）、成績回避目標尺度（ $\alpha = .85$ ）のいずれも満足する水準であった。

援助要請尺度

援助要請尺度の項目について、主因子法プロマックス回転による探索的因子分析を行った。因子抽出の条件は初期の固有値 1.0 以上とした。各因子を構成する因子負荷量を 0.4 以上として因子を解釈したところ、各 4 項目で構成される 3 因子が抽出された。各因子を構成する各項目の因子負荷量は、.52～.86 であった（表 3）。

表3. 援助要請の探索的因子分析

		F1	F2	F3
要請回避 ($\alpha = .86$)	できないことは、先生に質問せず、できないままにしている。	0.86	-0.01	0.02
	わからないことは、先生に聞かず、わからないままにしている。	0.79	0.06	-0.09
	先生の助言が必要な場合でも、質問をせずにあきらめる。	0.78	-0.10	0.07
	先生に教わればできることも、助言を求めずに止めてしまう。	0.71	0.07	-0.01
依存的要請 ($\alpha = .80$)	がんばればできそうなことでも、すぐに先生の力をあてにする。	-0.06	0.74	-0.01
	できないことがあるときは、すぐに先生の力をあてにする。	0.02	0.73	0.08
	わからないことは、自分で考える前に先生を頼る。	-0.03	0.72	-0.07
	少し考えたらわかることでも、すぐに先生の助言を求める。	0.07	0.66	0.00
適応的要請 ($\alpha = .73$)	先生に質問するときは、答えだけではなく、考え方も聞く。	0.01	0.00	0.80
	先生に質問するときは、よくわかるまで説明を聞く。	-0.06	0.06	0.66
	先生に質問するときは、答えよりもヒントを聞いてみる。	0.05	-0.04	0.58
	先生に質問するときは、どこがわからないかよく考えてから聞く。	0.00	-0.01	0.52
F1		—		
F2		0.34	—	
F3		-0.39	-0.13	—

次に、これらの因子構造の妥当性を検討するため、検証的因子分析を行ったところ、モデル適合度指標は良好な値（GFI=.968, CFI=.966, RMSEA=.053）であった。各潜在変数から各観測変数への影響指数については、.52～.85 という値が示された。各尺度の信頼性の検討として内的整合性を算出したところ、適応的援助要請尺度（ $\alpha = .73$ ）、依存的援助要請尺度（ $\alpha = .80$ ）、要請回避尺度（ $\alpha = .86$ ）のいずれも満足する水準であった。

基本統計量

各尺度の平均値，標準偏差，歪度，尖度を算出し，相関行列を示した（表4）．0.08 以上あるいは-0.06 以下の相関係数は 5%水準で有意である．まず，各尺度それぞれの下位尺度間の相関関係を示す．有能感と失敗恐怖には弱い負の相関が示された．達成目標については，熟達接近目標と成績回避目標がほぼ無相関であり，その他の尺度間には弱から中程度の正の相関が示された．援助要請については，適応的援助要請と依存的援助要請がほぼ無相関であり，適応的援助要請と要請回避には弱い負の相関，依存的要請と要請回避には弱い正の相関が示された．

次に，影響関係を仮定する尺度間の相関関係を示す．有能感と熟達接近目標，成績接近目標には弱い正の相関が示された．失敗恐怖と，熟達回避目標，成績接近目標，成績回避目標には弱から中程度の負の相関が示された．熟達接近目標と，適応的要請には中程度の正の相関，依存的要請，要請回避には弱い負の相関が示された．熟達回避目標と，適応的要請，依存的要請には弱い負の相関が示された．成績接近目標と，依存的要請には弱い正の相関，要請回避には弱い負の相関が示された．成績回避目標と，依存的要請，要請回避には弱い負の相関が示された．

表4. 基本統計量と相関行列

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1 有能感	—								
2 失敗恐怖	-0.21	—							
3 熟達接近目標	0.23	0.01	—						
4 熟達回避目標	-0.06	0.36	0.42	—					
5 成績接近目標	0.35	0.14	0.30	0.27	—				
6 成績回避目標	-0.06	0.48	0.01	0.31	0.38	—			
7 適応的要請	0.08	-0.02	0.41	0.23	0.05	0.01	—		
8 依存的要請	-0.09	0.21	-0.10	0.10	0.08	0.16	-0.08	—	
9 要請回避	-0.23	0.32	-0.32	0.05	-0.06	0.21	-0.32	0.28	—
平均値	2.47	3.07	3.91	3.34	2.88	2.96	3.36	2.12	2.50
標準偏差	0.96	0.96	0.76	0.89	0.90	0.95	0.85	0.74	0.94
歪度	0.34	-0.15	-0.74	-0.32	0.18	0.09	-0.39	0.31	0.36
尖度	-0.42	-0.40	0.70	-0.22	-0.11	-0.46	0.28	-0.06	-0.15

構造方程式モデリング

因子分析により識別された因子を潜在変数として、「有能感・失敗恐怖→達成目標→援助要請」という達成動機づけの階層モデルに基づくパスモデルを構築し、構造方程式モデリングを行った。

パスモデルの構築にあたり、各潜在変数間の影響関係は相関行列を参考にして、先述した 0.08 以上あるいは 0.06 以下の 5% 水準で有意な相関が示された変数間にパスを仮定した。パスモデルを構築した後、推定値を求めたところ、モデル適合度指標の値が低かった (GFI=.901, CFI=.888, RMSEA=.077)。そこで、モデルの意味が損なわれないよう修正を試みた。修正指数を確認したところ、熟達接近目標と熟達回避目標の誤差変数間、成績接近目標と成績回避目標の誤差変数間、適応的要請と要請回避の誤差変数間に相関を仮定することでモデルが改善されるとの表示がされていた。相関行列では、それぞれの尺度間には弱から中程度の正あるいは負の値が示されたことから、それらの誤差間にも相関があると考えられた。そこで、これらの誤差変数間に相関を仮定することでモデルの修正を行った。また、ワルド検定により有意水準 5% に達していないパスを削除した。再度、推定値を求めたところ、モデル適合度指標は良好な値となった (GFI=.932, CFI=.932, RMSEA=.061)。これは、パスモデルとデータが適合しており、有能感・失敗恐怖から達成目標を媒介して援助要請に影響するモデルが妥当であることを意味している (図 1)。

各要因間の相関関係あるいは影響関係について、図上に示されている各潜在変数間の相関係数あるいは影響指数は、-.34～.62 の値となり、全て 5% 水準で有意である。有能感と失敗恐怖には低い負の相関が示された。有能感からは熟達接近目標と成績接近目標のそれぞれへ正の影響が示された。失敗恐怖からは、熟達回避目標、成績接近目標、成績回避目標のそれぞれへ正の影響が示された。これらのことは、熟達あるいは成績に関わらず回避目標へは失敗回避欲求である失敗恐怖から正の影響が示されたこと、一方、接近目標への影響について、熟達接近目標へは成功接近欲求である有能感から正の影響が示されたが、成績接近目標へは有能感と失敗恐怖という成功接近欲求と失敗回避欲求の両者から正の影響が示されたことを意味している。

熟達接近目標からは、適応的要請へ正の影響が示され、依存的要請と要請回避のそれぞれへ負の影響が示された。熟達回避目標からは適応的要請と依存的要請のそれぞれへ正の影響が示された。成績接近目標からは要請回避へ負の影響が示された。成績回避目標からは依存的要請と要請回避のそれぞれへ正の影響が示された。これらのことは、適応的要請

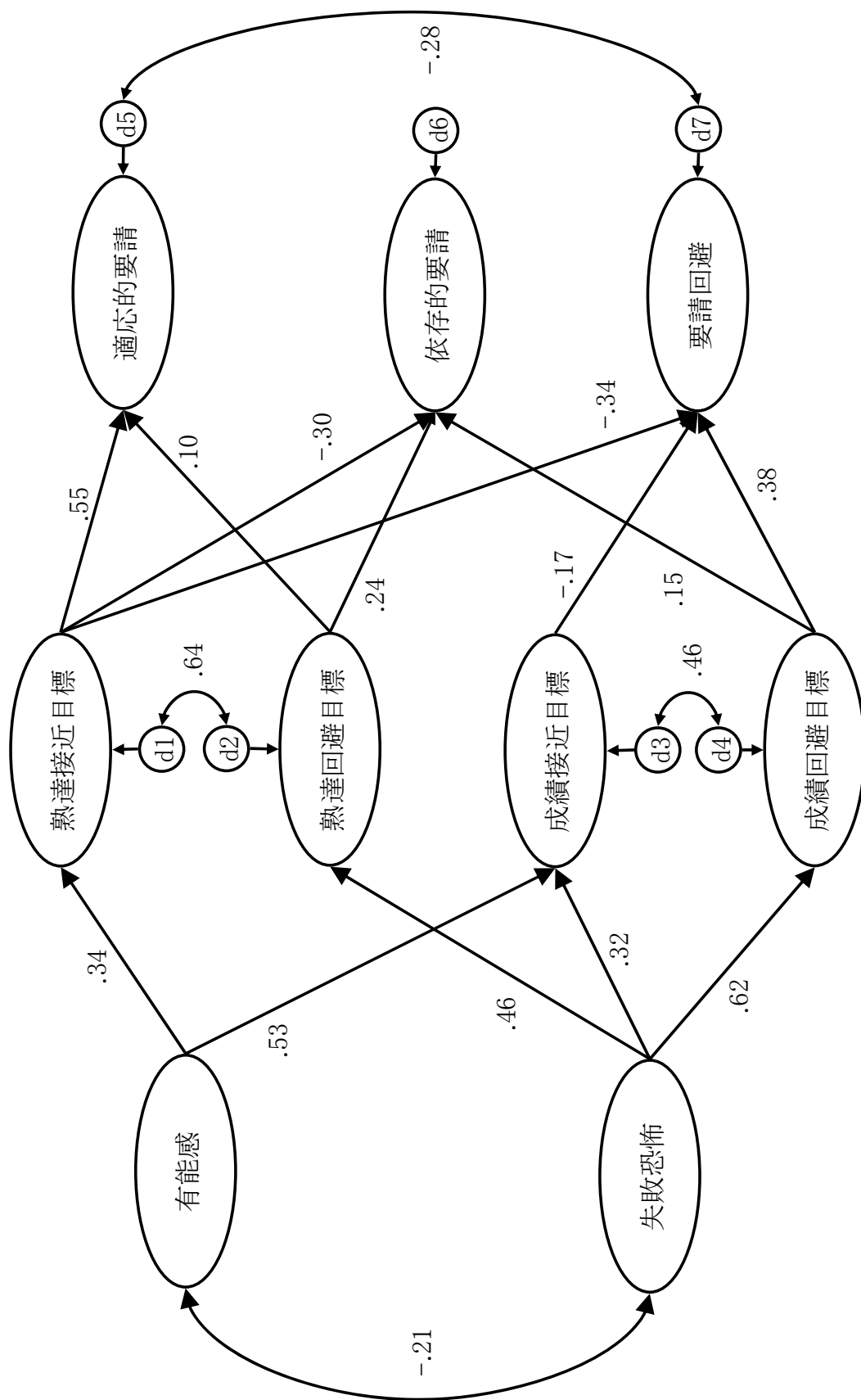


図1. 構造方程式モデリングの結果

へは接近あるいは回避に関わらず熟達目標から正の影響が示されたこと、依存的要請へは、熟達あるいは成績に関わらず回避目標から正の影響、熟達接近目標から負の影響が示されたこと、要請回避へは、熟達あるいは成績に関わらず接近目標から負の影響、成績回避目標から正の影響が示されたことを意味している。

パスモデル全体を通すと、有能感からは、熟達接近目標を媒介として、適応的要請、依存的要請、要請回避に影響すること、また、成績接近目標を媒介として、要請回避に影響することが示され、失敗恐怖からは、熟達回避目標を媒介として、適応的要請、依存的要請に影響すること、また、成績接近目標を媒介として要請回避に影響すること、そして、成績回避目標を媒介として、依存的要請、要請回避に影響することが示された。

4. 考察

本研究の目的は、達成動機づけの階層モデルに基づき、体育授業における達成目標と援助要請の関係を明らかにすることであった。達成動機づけの階層モデルを検討するために必要となる有能感尺度、失敗恐怖尺度、達成目標尺度、援助要請尺度を作成し、探索的因子分析及び検証的因子分析を行った結果、それぞれの尺度の妥当性は認められるものであった。また、各尺度の内的整合性を算出したところ、いずれの尺度も十分な信頼性を得られる水準であった。これらの尺度によって、有能感・失敗恐怖から達成目標を媒介して援助要請へ影響することを検討するための構造方程式モデリングを行った結果、良好なモデル適合度指標が示された。これは、有能感・失敗恐怖は達成目標を媒介して援助要請へ影響するパスモデルが支持されたことを意味している。

各要因間に示された影響関係について、本研究のデータは一度の調査で得られた横断的なものであるため、先行要因が高まる（低下する）ことにより後続要因が高まる（低下する）という時間的な前後関係を実証したものではないという限界はあるが、実践への示唆という観点から考察していく。有能感からは熟達接近目標と成績接近目標へ正の影響が示された。これは、運動の上達を実感し、自己の運動能力に満足できるようになれば、学ぼうとすることはできる限り習得したいという気持ちが高まると共に、他者よりも上手になりたいという気持ちも高まることを示唆している。失敗恐怖からは、熟達回避目標、成績接近目標、成績回避目標へ正の影響が示された。これは、失敗したときのことを考えすぎると、他者より上手になりたいという気持ちがありながらも、他者より劣るところを見せ

たくないという気持ちが強くなり、さらには、学習したことへの習熟度に不安を感じるようになることを示唆している。

有能感と失敗恐怖の両方から成績接近目標へ正の影響が示されたことについて、これは両者が高まることあるいはどちらか一方のみが高まることのいずれによっても成績接近目標は高まることを示唆することになるが、この結果は、Nien & Duda (2008) と同様であった。従来の成績目標は諸刃の剣と称されることがあった（例えば、Barkoukis et al., 2007; Stoeber et al., 2008）ことは、成績目標には接近と回避の両側面が混在していたことを意味しており、それにより先行研究の結果が一致しなかったと考えられる。この問題の解決策として、接近と回避の両側面から達成目標が概念化され、達成動機づけの階層モデルが提唱された。しかしながら、このモデルでは、従来の成績目標から回避的側面のみを分離させた成績回避目標は概念化できても、成績接近目標については接近的側面のみを分離することができずに回避的側面も含まれているのではないだろうか。すなわち、成績接近目標と従来の成績目標は同義であると考えられる。

達成目標から援助要請への影響について、熟達接近目標からは、適応的要請へ正の影響、依存的要請と要請回避へ負の影響が示された。これは、学ぼうとすることをできる限り習得したいという気持ちが強ければ、自分でどこが分からないのかをよく考えた上で、教師の力に頼りすぎることなく、直接的な答えよりもヒントを尋ねるようになり、分からないことをそのままでは終わらせず、課題解決の手立てを模索するようになることを示唆している。また、熟達接近目標からはどの援助要請へも有意な影響が示されていることから、援助要請を規定する中核的な要因になると考えられる。野崎（2003b）の研究では、本研究と同様、熟達目標から、適応的要請へ正の影響、要請回避へ負の影響が示されている。このことからすると、熟達接近目標は従来の熟達目標に相当する概念であると考えられる。

熟達回避目標からは適応的要請と依存的要請から正の影響が示された。これは、学んだことの習熟度に不安を抱えていると、自分でどこが分からないかをよく考えながらも、教師の力を頼ることが多くなることを示唆している。成績接近目標からは要請回避へ負の影響が示された。これは、他者よりも優れたたいという気持ちが強ければ、できないことをできないままにすることが少なくなることを示唆している。しかしながら、成績接近目標から適応的要請や依存的要請への正の影響が示されなかったことからすると、他者より優れたたいという気持ちのみでは適応的あるいは依存的といった援助要請の質に影響しないと考えられる。成績回避目標からは依存的要請と要請回避へ正の影響が示された。これは、他

者より劣っているところを隠したい気持ちが強くなると、教師の力に頼ることが多くなり、分からないことをそのままにするようになることを示唆している。

接近と回避の両側面から概念化された達成目標により、各援助要請への影響も多様化された。特に、回避的な達成目標からの影響が示されたことは有意義であった。例えば、熟達回避目標と成績回避目標の両者からは依存的要請へ正の影響が示された。これは、他力本願的な援助要請の根源には回避的な達成目標が影響していることを示すものであった。すなわち、援助要請のメカニズムには接近的な達成目標のみではなく、回避的な達成目標も関与していることが明らかになった。影響指数の値からすると、回避的な達成目標は適応的要請の促進というよりは、依存的要請や要請回避といった、学習には望ましいとは言えない援助要請を促進することになるが、それは、失敗恐怖によるものであることが示されている。有能感と失敗恐怖の相関が弱いことからすると、有能感のみを高めても、失敗恐怖は低下しないと考えられるため、体育授業においては、有能感を高めることのみならず、失敗恐怖を取り除くことも同時に実践できるような指導が求められる。

本研究では、達成目標を接近と回避の両側面から捉え、多面的な援助要請への影響を検討した。回避的な達成目標が援助要請に影響する要因であったことからすると、達成動機づけの階層モデルの応用は有効であったと考えられる。国内外の教育心理学のみならず、欧米の体育・スポーツ心理学の研究動向からすると、達成動機づけの階層モデルあるいは援助要請の研究は、今後もさらに発展していくであろう。わが国の体育・スポーツ心理学においても積極的な研究の展開を期待したい。

文献

- Ames, C. (1992). Classrooms: Goals, structures, and student motivation. *Journal of Educational Psychology*, 84, 261-271.
- Atkinson, J.W., & Feather, N.T. (1966). *A theory of achievement motivation*. New York: Willey.
- Barkoukis, V., Thogersen-Ntoumani, E.C., Ntoumanis, N., & Nikitaras-N. (2007). Achievement goals in physical education: Examining the predictive ability of five different dimensions of motivational climate. *European Physical Education Review*, 13, 267-285.
- Biddle, S.J.H., Wang, C.K.J., Kavussanu, M., & Spray, C.M. (2003). Correlations of

- achievement goal orientations in physical activity: a systematic review of research. *European Journal of Sport Science*, 5, 1-20.
- Butler, R. (1998). Determinants of help seeking: Relations between perceived reasons for classroom help-avoidance and help seeking behaviors in an experimental context. *Journal of Educational Psychology*, 90, 630–643.
- Butler, R., & Neuman, O. (1995). Effects of task and ego achievement goals on help-seeking behaviors and attitudes. *Journal of Educational Psychology*, 87, 261–271.
- Chen, L.H., Wu, C.H., Kee, Y.H., Lin, M.S., & Shui, S.H. (2009). Fear of failure, 2×2 achievement goal and self-handicapping: An examination of the hierarchical model of achievement motivation in physical education. *Contemporary Educational Psychology*, 34, 298-305.
- Conroy, D.E., Elliot, A.J., & Hofer, S. M. (2003). A 2×2 achievement goals questionnaire for sport. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 25, 456–476.
- Conroy, D.E., Willow, J.P., & Metzler, J.N. (2002). Multidimensional fear of failure measurement: The performance failure appraisal inventory. *Journal of Applied Sport Psychology*, 14, 76-90.
- Duda, J.L. (1989). Relationship between task and ego orientation and the perceived purpose of sport among high school athletes. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 11, 3, 318-335.
- Duda, J.L., & Hall, H.K. (2001). Achievement goal in sport: Recent extensions and future directions. In R. N. Singer, H. A. Hausenblas, & C. M. Janelle (Eds.), *Handbook of research of sport psychology* (2nd ed., pp.417-434). New York: Wiley.
- Duda, J.L., & Ntoumanis, N. (2003). Correlates of achievement goal orientations in physical education. *International Journal of Educational Research*, 39, 415-436.
- Dweck, C.S. (1999). *Self-theories: Their role in motivation, personality, and development*. Philadelphia: Psychology Press.
- Elliot, A.J., & McGregor, H. (2001). A 2×2 achievement goal framework. *Journal of Personality and Social Psychology*, 80, 501-519.
- Karabenick, S.A. (1998). Strategic help seeking: Implications for learning and teaching.

- Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- McAuley, E., Duncan, T., & Tammen, V.V. (1989). Psychometric properties of the intrinsic motivation inventory in a competitive sport setting: A confirmatory factor analysis. *Research Quarterly of Exercise and Sport*, 60, 48–58.
- 村山航 (2003). 達成目標理論の変遷と展望—「緩い統合」という視座からのアプローチ—. *心理学評論*, 46, 564-583.
- Nadler, A. (1998). Relationship, esteem, and achievement perspectives on autonomous and dependent help seeking. In S. A. Karabenick (Ed.), *Strategic help seeking: Implications for learning and teaching* (pp. 61–93). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Newman, R.S. (1990). Children's help-seeking in the classroom: The role of motivational factors and attitudes. *Journal of Educational Psychology*, 82, 71–80.
- Newman, R. S. (1991). Goals and self-regulated learning: What motivates children to seek academic help?. In M. L. Maehr & P. R. Pintrich (Eds.), *Advances in motivation and achievement*, Vol. 7 (pp. 151–183). Greenwich, CT: JAI Press.
- Newman, R. S. (1998). Students' help seeking during problem solving: Influences of personal and contextual achievement goals. *Journal of Educational Psychology*, 90, 644–658.
- Newman, R.S. & Goldin, L. (1990). Children's reluctance to seek help with schoolwork. *Journal of Educational Psychology*, 82, 92–100.
- Nicholls, J. G. (1989). *The competitive ethos and democratic education*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Nien, C.L., & Duda, J.L. (2008). Antecedents and consequences of approach and avoidance achievement goals: a test of gender invariance. *Psychology of Sport and Exercise*, 9, 352-372.
- 野崎秀正 (2003a). 学業的援助要請の規定因に関する研究の動向と展望. 広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部 学習開発関連領域, 52, 73-82.
- 野崎秀正 (2003b). 生徒の達成目標志向性とコンピテンスの認知が学業的援助要請に及ぼす影響：抑制態度を媒介としたプロセスの検証. *教育心理学研究* 51, 141-153.
- Roberts, G.C. (2001). Understanding the dynamics of motivation in physical activity: The influence of achievement goals on motivational processes. In G. C. Roberts

- (Ed.), *Advances in motivation in sport and exercise* (pp. 1-50). Champaign, IL: Human Kinetics.
- Roberts, G.C., Treasure, D.C., & Balague, G. (1998). Achievement goals in sport: Development and validation of the perception of success questionnaire. *Journal of Sport Sciences*, 16, 337-347.
- Ryan, A.M., & Pintrich, P.R. (1997). Should I ask for help? The role of motivation and attitudes in adolescents' help seeking in math class. *Journal of Educational Psychology*, 89, 329-341.
- 瀬尾美紀子 (2007). 自律的・依存的援助要請における学習観とつまずき明確化方略の役割 : 多母集団同時分析による中学・高校生の発達差の検討. *教育心理学研究*, 55, 170-183.
- Stoeber, J., Stoll, O., Pescheck, O., & Otto, K. (2008). Perfectionism and achievement goals in athletes: Relations with approach and avoidance orientations in mastery and performance goals. *Psychology of Sport and Exercise*, 9, 102-121.
- 上淵寿 (2003). 達成目標理論の展望 その初期理論の実際と理論的系譜. *心理学評論*, 46, 640-654.
- 上淵寿・沓澤糸・無藤隆 (2004). 達成目標が援助要請と情報探索に及ぼす影響の発達 : 多母集団の同時分析を用いて. *発達心理学研究*, 15, 324-334.
- Wang, C.K.J., Biddle, S.J.H., & Elliot, A.J. (2007). The 2 × 2 achievement goal framework in a physical education context. *Psychology of Sport and Exercise*, 8, 147-168.